

織物製成人女子・少女服製造業(不織布製及びレース製を含む) 日本の高級婦人服を作り出す技能士達

7-13 株式会社 三和ドレス

高級婦人服を作り出すファクトリーの風景

布と型紙、ミシン、アイロン。フロアの入り口から奥に向かうにしたがって、フロアいっぱいに整然と配置されたデスクの上に置かれている道具が変わっていく。

型紙付きの布は、ベテランの技能士達の手によってミシンの針を軸にしてくるくると回転されながら他の布と縫い合わされていく。その奥のデスクでは、縫い合わされた布に、流れるような滑らかさでアイロンの熱が当てられる。これは、岩手県盛岡市で国内の高級婦人服ブランドの多くを生産する三和ドレスのファクトリーの風景である。人の身体に合わせた微妙な丸みや風合いを出すためのこの作業は機械で代替することができず、今日においても技能士達の卓越した感覚に頼るところが大きいという。

1着10万円から30万円の婦人服を作り出す同社の社長である大沢孫蔵氏にお話を伺った。



三和ドレスのつくる高級婦人服

厳しい仕事の中で能力開発の重要性を痛感

もともと東京の食品会社で幹部候補として働いていた大沢氏が、やむを得ずその会社を退職した後に、選んだのは繊維関係の仕事。「将来は独立して自分の会社でやっていくつもりでした。この仕事は、ミシンとアイロンがあれば大きな設備がいらない。だから選んだんです。」と大沢氏は当時を振り返る。

知り合いの工場から職人を派遣してもらい、3台のミシンを使って始めたビジネスは決して楽ではなかった。

「夕方に仕事をもらい、翌日にでき上がった品物を納める毎日を送った時期もあります。6畳2間の部屋で、数ヶ月間ほとんど睡眠もとらず、畳の上にベニヤ板を敷いて布を拡げて裁断しました。」

そんなハードな生活の中で、大沢氏は自分の技能の無さを痛感し、自分がミシンやアイロンを使うのではなく、

それらの扱いがうまい人にやってもらおう、自分はそのマネジメントに徹しようという考えをするようになったという。現在は技能検定委員も務める大沢氏的能力開発を重視する姿勢はこういった経験が土台となっているようだ。

退職した後も職人のブランドとして残る検定資格

現在は、盛岡市と二戸市にそれぞれ工場を持つまでに成長した三和ドレス。従業員約162名のうち、約40%が技能検定に合格している。また、技能五輪への常連企業でもあり、多くの受賞者を輩出している。

大沢氏は「従業員は高卒の人がほとんどですね。最近入社してくる子は、学校の成績も優秀だし、技能五輪に出場したいという明確な目標を持っているので、技能習得のスピードも早いです。」と若手への期待を語る。同社の能力開発への取組と、それに伴う婦人服のクオリティの高さが広く地元にも知れ渡り、優れた人材の採用につながっているようだ。

技能検定については、優秀な作り手を育てていくためには不可欠な制度だと大沢氏は考えている。

「検定に挑戦することで、本人の能力は間違いなく上がります。実際の作業は全工程を複数の工程に分割して流れ作業で行いますが、技能検定では全てのプロセスが評価の対象になります。だから、検定合格者は多能工としての技能が身に付いている。それが次の工程を担当する人に配慮した作業につながり、生産性や品質の向上につながっていきます。また、女性が多い職場ですから、いつかうちを離れていく時期があるかもしれない。そのときに、検定合格の実績があれば他の企業でもきちんと評価してもらえる。検定合格は彼女達自身にとっても重要なことだと思います。」苦労された大沢氏ならではの配慮を感じる言葉だった。



大沢社長

株式会社 三和ドレス

- 業種: 織物製成人女子・少女服製造業(高級婦人服製造)
- 設立: 昭和41年
- 従業員: 162名
- 住所: 盛岡市東仙北
- 技能士: 20名
- 代表者: 大沢孫蔵

技能士へのインタビュー

滝浦 清子氏 (27 歳) 第 42 回技能五輪全国大会優勝
千葉 未来氏 (21 歳) 第 46 回技能五輪全国大会第 3 位、国際大会代表
藤村 亨氏 (20 歳) 第 47 回技能五輪全国大会第 3 位

3 人の五輪選手へのインタビュー

三和ドレスでの技能士の中から、技能五輪全国大会や技能五輪国際大会に出場経験のある清浦氏、千葉氏、藤村氏にお話を伺うことができた。それぞれ技能五輪全国大会で入賞の経験があり、千葉氏は世界大会の代表としてカルガリーで技を競った経験がある。

三和ドレスに入社した時期はそれぞれ異なるが、滝浦氏も千葉氏も藤村氏も、ともに衣服を製作することに対して興味・関心を持っていたことが入社のも動機だったという点では共通している。そんな彼女達にとって、能力開発への前向きな考え方と、常に高品質の婦人服を作り続けてきたという実績を持つ三和ドレスは、大きな魅力を持った企業として映ったのではないだろうか。実際、第 47 回の技能五輪全国大会に出場した藤村氏は、技能五輪出場常連である同社に働きたい、という強い希望を持って入社してきたと大沢社長は語る。

分業して製作していくことの難しさ

三和ドレスでは、個人の経験や適性に応じて担当する工程も異なる。例えば、藤村氏は裏地の縫製、千葉氏は袖の部分の縫製を担当しているという。滝浦氏はミシンで衣服の各パーツを縫い合わせる工程を担当している。



滝浦氏

「どの工程にもそれぞれ難しさがあります。例えばアイロンがけも失敗すればジャケットの形が崩れてしまうので、気が抜けません。」(滝浦氏)

「色々な人の手を通ってくるので、自分のところにくるものは一枚一枚微妙に形が違います。それを調整していくところが今担当している仕事の難しいところですね。」(千葉氏) 多くの人が携わる作業だけに、微妙な調整も必要になってくる。高い技術はこういう場面でも強みを発揮しているに違いない。

技能五輪大会で得られたもの

現在は服ができ上がるまでの一工程を担当している 3 人だが、技能五輪は普段の仕事とは勝手が異なる。仕事とはまた異なった醍醐味があると 3 人は話す。

「仕事では婦人服製作の最初から最後までに関わることは普通ありません。でも、大会では一着作り上げるまでが課題。しかも、着る人に合わせて一着一着の個性も考えて製作していかなければならないんです。」(滝浦氏)

「大会への出場が決まるまでは、裏地を担当していました。だから少し苦労した部分もあるんですけど、逆に大会に出場することで学べた部分もあります。例えば、特定の工程をずっとやっていると、自分の担当している部分が他のどの人の仕事に関係してくるのか、ということを考えることはあまりないのですが、それを把握することができました。全体の工程の中で自分が担当している部分の位置や、他の工程のことが頭に入っていると、他の班の人を手伝うときに役に立てることもあると思います。」(千葉氏)

「仕事の時は、工程の流れが分からなかったんですが、大会に出場することで、分かるようになったのが良かったです。」(藤村氏)



藤村氏

いつかは個性のある服を 1 人で作ってみたい

今後について聞いてみたところ、3 人とも自分のできることの範囲を広げていきたいという点を共通して挙げた。

「まずは会社のために自分ができる範囲で貢献できればと思います。でもゆくゆくは、自分でできる工程を増やしていきたいです。」(藤村氏)

「国際大会への出場が決まって、それまで手掛けたことが無いポケットや襟の部分も作るという機会に恵まれました。色々な作り方を学んで、自分で一着の服を製作できればと思います。」

人の体型は人によって違うので、服も一着一着異なる個性があると思うんです。相手にぴったりの服を作ってみたいと思います。」(千葉氏)

三和ドレスの高級婦人服は彼女達のような向上心を持った職人たちによって今日も生み出されている。



国際大会での千葉氏